

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
令和3年度研究開発実施報告書

「科学技術イノベーション政策のための科学」

研究開発プログラム

「市民科学とパーソナルデータを基盤とした発達障害支
援の臨床の知の共財化」

熊 仁美

(特定非営利活動法人ADDS 共同代表)

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2 - 1. 研究開発目標	2
2 - 2. 実施内容・結果	3
2 - 3. 会議等の活動	9
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	13
4. 研究開発実施体制	13
5. 研究開発実施者	15
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	17
6 - 1. シンポジウム等	17
6 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	18
6 - 3. 論文発表	18
6 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	18
6 - 5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等	18
6 - 6. 知財出願	18

1. 研究開発プロジェクト名

市民科学とパーソナルデータを基盤とした発達障害支援の臨床の知の共財化

*計画変更点：2022年度より、タイトルを「市民科学とパーソナルデータを基盤とした発達障害支援の臨床の知の共財化」に変更

2. 研究開発実施の具体的内容

2 - 1. 研究開発目標

- ・発達障害支援における「臨床の知」が可視化され、様々な現場の支援で活用されるようになる。
- ・オープンサイエンス型の研究手法に基づくエビデンス構築プラットフォームが、様々な地域・領域で使われるようになる。
- ・調査研究と実装研究を通じて得られた知見を、「対人支援領域における科学技術活用ハンドブック（仮）」としてまとめ発行することで、対人支援における科学技術活用のノウハウが可視化される。
- ・情報の電子化政策を、障害福祉領域や、医療、母子保健、教育領域など多様な領域の相互かつ緊密な連携を維持しながら進める重要性とそれに役立つ実装科学的知見が政策提言として広く発信される。

2 - 2. 実施内容・結果

(1) スケジュール

実施項目	令和元 (2019) 年度	令和2 (2020) 年度	令和3 (2021) 年度	令和4 (2022) 年度
調査研究	←→			
支援者エンパワメントツールを活用したビッグデータ構築とUXの定量化-AI-PAC		←→		
支援者エンパワメントツールを活用したビッグデータ構築とUXの定量化-ロボット・VR		←→		
事例研究を通じた臨床の知の蓄積プラットフォームの構築			←→	
バーチャル政策検討委員会				←→
法制度的検討・政策提言				←→
まとめ				←→

(2) 各実施内容

【実施項目 1】 支援者エンパワメントツールを活用したビッグデータ構築とUXの定量化

1-①早期療育プロセスにおけるUXの定量化

発展的開発を行ったAI-PACを用いて、現場での実証実験を行った。データフォーマットとしては、発達に関する基本情報や、課題の実施者タイプ、課題ID、困りごと、アドバイス、課題へのモチベーション、行動面の問題、困りごとに対する状況、困りごとに対する取り組み内容、強化子、記録日時、項目、課題試行結果などのデータを蓄積した。

10月～3月の6か月間で、民間の療育機関3か所および24名の保護者への協力を依頼し、お子さんについて、月齢や発達検査データといった基本プロフィールと、日々の発達課題の実施状況、使用した強化子や援助手続きなどを紐づけたデータの蓄積を行った。データ件数は、発達課題の達成状況のデータが約1400件、日々の発達課題の達成状況のデータが約100万件程度となった。新型コロナ感染拡大により、現場での実証実験の開始が半年ほど遅れた影響で、今年度は、蓄積したデータの解析とリコメンド機能の開発までを完了することはできなかった。解析とリコメンド機能の開発・実証については、次年度に実施するものとする。

1-②人材育成プロセスにおけるUXの定量化

VRは、身体感覚を含む学習をデザインするため、VR空間と受講生の身体動作とのイン

タラクションがある形で、かつその学習のログが蓄積できるよう、発展的開発を行い、現場での試験運用を行った。今年度はコントローラーを使ってVR空間で受講者が実際に身体を動かし、子供に触ったり、物を掴んで渡したりする実際の動作を通してインタラクティブに学ぶモードの開発を行った。試験版ができたところで、実際に入社後1年に満たないセラピスト2名を対象にテスト運用を行い、アンケートへの回答を求めた。操作が複雑であることや、バグと思われる挙動が多くあり、2度の調査と修正依頼を経てインタラクティブモードの開発が完了した(図1)。

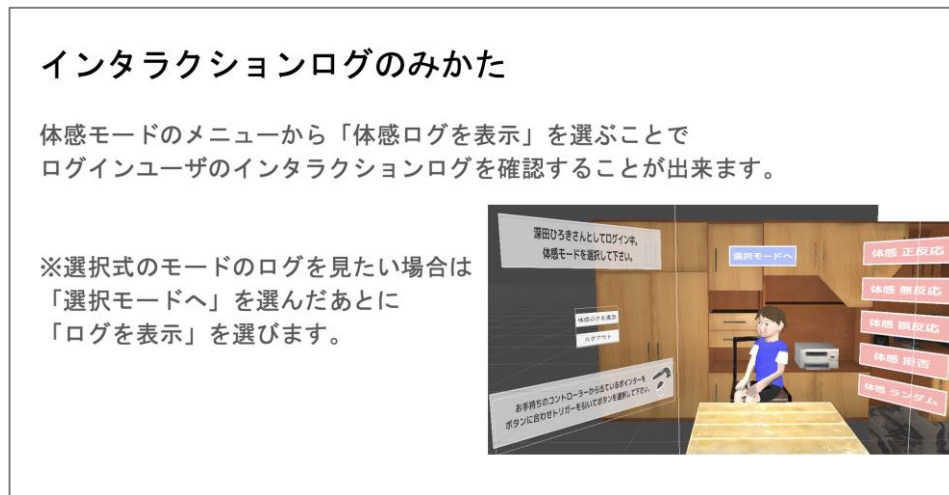


図1 インタラクティブモードの画面

【実施項目 2】事例研究を通じた臨床の知の蓄積プラットフォームの構築

完成した事例研究の蓄積アプリケーション「AI-PAC LAB.」を活用した実証実験として、公認心理師の会の後援を得て、事例研究を現場実践するための全3回のオンラインワークショップを開催した(図2)。ワークショップの事前準備として、事例研究を実施するための枠組みの作成(図3)や、同意書フォーマットや、AI-PAC LAB.の使用マニュアル、事例研究を計画するためのワークシートなどを作成した。

ワークショップは、(1)動画や資料を用いた事前学習、(2)AI-PAC LAB.の使い方、応用行動分析学にもとづく発達支援や、シングルケースデザインや効果量に関して専門家より講義を行う1DAY講習、(3)事例研究計画シートの作成支援、実践のポイント、事例紹介、各参加者への個別フィードバックなどを行う中間研修、(4)全参加者にメンターが個別面談を行い、事例研究の実施について助言を行う個別相談、(5)事例研究についての成果発表と専門家からの講評を行う最終発表会という5つの構成で行った。

ワークショップには、発達支援に関わる公認心理師10名とその他の資格を持つ3名の計13名が参加した。新型コロナウイルスの感染拡大の影響や、個別の事情により3名が途中で参加を中断したため、最終発表を行ったのは10名(公認心理師9名、その他の資格1名)となった。

アプリケーションを活用！
参加費無料

シングルケースデザインを活用した「発達支援」事例研究ワークショップ

公認心理師法の施行に伴い、心理学をベースとした対人支援領域における科学者-実践家モデルへの関心が高まっています。本ワークショップは、研究方法の一つである「シングルケースデザイン」に基づく**アプリ**を活用し、発達臨床を「可視化」し、実践の知識と技術の向上を目指す研究プロジェクトの一環として開催致します。専門家や臨床家との**親密なやりとり**を通じ、**臨床技術を高める機会**としてぜひご参加をお願い致します。

対象
子どもの発達支援に携わる支援者
15名 *公認心理師資格を有する方を優先

講師・アトハイザー

事前学習 日時: 11/12~11/26@オンライン
E-learningを活用し、受講に必要な基礎知識を各自学んでいただけます。

1DAY研修 11/27(土)9:30-16:30@オンライン
最先端の発達支援や事例研究のノウハウ、アプリの使い方の講義を実施します。

中間研修 12/22(水)18:00-19:30@オンライン
事例研究の中間報告と進め方についての中間研修を行います。

個別相談 1/9~2/9の間で個別調整@オンライン
参加者全員にメンターが行き、事例研究の個別相談を行います。(15分程度/回)

最終発表会 2/26(土)10:00-15:00@オンライン
事例研究についての発表会とアドバイザーからの講評を行います。

お申込み
締切: 11/5
<https://forms.gle/Zlmi6C74ZunlgPC9>
*多数の場合は選考をさせていただきます

図2 ワークショップのチラシ

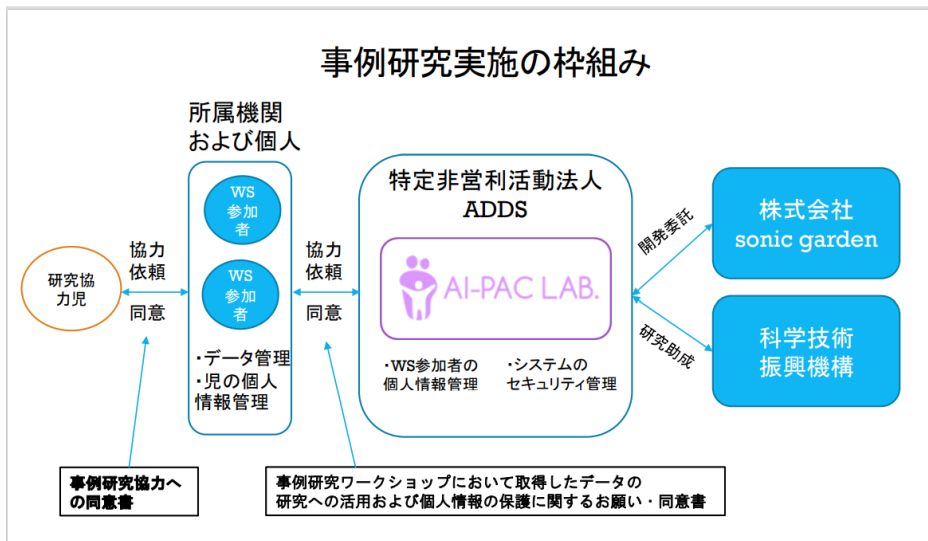


図3 事例研究実施の枠組み

実証実験の結果、15件の事例研究データを蓄積することができた(図4)。また、AI-PAC LAB.には、事例研究の効果の定量的な判定方法として、グラフの数値から効果量のTAUとPNDの2つの数値を自動算出し、その結果をもとに4段階(大いに効果あり、効果あり、一定の効果あり、検証の必要あり)で効果の判定を行う「自動効果判定」機能の実装が完了している。



図4 AI-PAC LAB.に蓄積された事例研究画面イメージ

実証実験では、この効果判定機能の妥当性を検討するため、事例研究実施者への事後アンケートを実施し、行った事例研究の「効果」に関する自己評価を行った。具体的には、AI-PAC LAB.で算出される効果量をつかった判定と同様の4段階の選択肢を用いて、事例研究の実施者に支援の効果について自己評価をしてもらった。自動効果判定機能の結果(図5)と、自己評価の結果(図6)の一致率(N=9)を調べたところ、7件が一致(78%)、2件が不一致(22%)となった。ある程度、自己評価との一致がみられたことから、今後も事例研究を蓄積し、自動効果判定の妥当性を検討していく予定である。

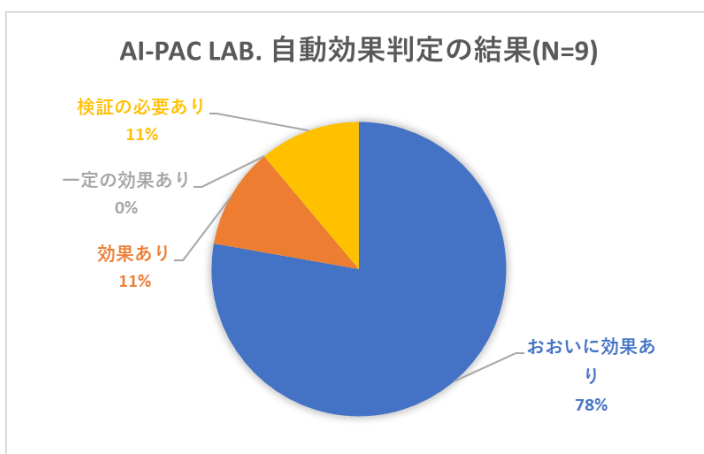


図5 自動効果判定機能の結果

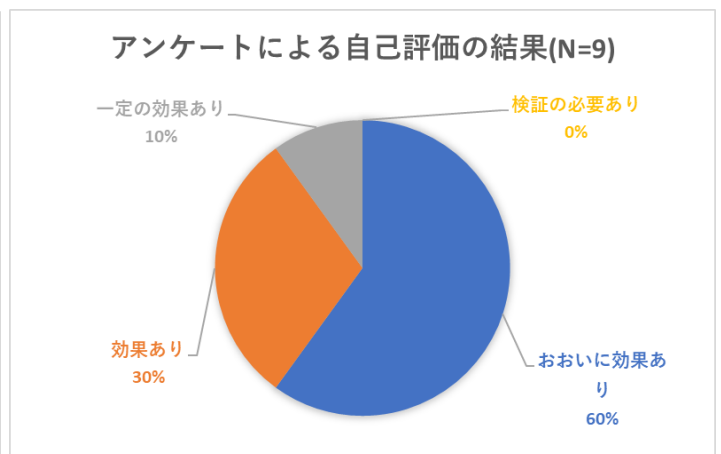


図6 研究実施者の自己評価結果

【実施項目 3】バーチャル政策委員会（障壁の可視化と対話による政策提言）

バーチャル政策委員会を3か月に1回程度開催した（図7）。また、そこでのディスカッションを踏まえて、RISTEXプログラムのアドバイザーおよび統括との意見交換を重ね、本プロジェクトの方向性の確認や、プロジェクト名の変更を行った。2月には、市民が参加できるシンポジウムの開催を行い、本プロジェクトの成果報告を行うとともに、講師を招いて先端的なパーソナルデータについての講演や、学校教育におけるデータ活用についての講演を行い、88名が参加した。また、デジタル庁における意見交換や、鎌倉市スマートシティ官民研究会へのパートナー会員への応募を行い、PLRを活用した相談支援研究について、鎌倉市の担当者との協議を重ねた。これらの結果をもとに、提言の骨子をまとめて、シンポジウム等で発表を行ったほか、これまで実施したICT活用インタビューをもとに、対人支援における科学技術の活用事例をまとめたレポートを作成した。

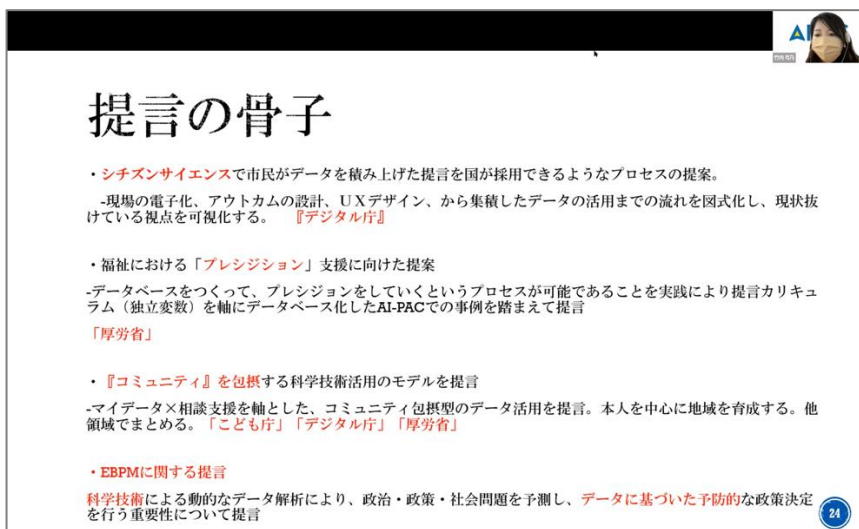


図7 バーチャル政策委員会の様子

【今年度の到達点④】PLRの開発と相談支援事業への実装

相談支援事業において、福祉サービス利用の際作成されるサービス等利用計画書及びモニタリング報告書を電子化し、マイデータとして保護者が権限を持てるようシステム開発を行った。具体的には、東京大学橋田教授の協力を得て、PLRというマイデータを作成できるアプリを使い、相談支援事業に関わるデータを関係者が共有できるよう、プロトタイプを構築し、スモールケースでの可能性試験を開始した。また、ICF（International Classification of Functioning, Disability and Health, 国際生活機能分類）を参考に、研究担当者と相談支援の実務を行う相談支援専門員で協議を行い、計画書の未就学児用の支援目標リストを作成し、アプリにて選択式で計画書を作成できるように開発を行った。これらの内容を地域で実装することを目指し、鎌倉市スマートシティ官民研究会へのパートナー会員への申し込みを行い、鎌倉市との面談も行い、市のスマートシティ構想に合致しているとの好感触を得た。

(3) 成果

【実施項目 1】 支援者エンパワメントツールを活用したビッグデータ構築とUXの定量化

1-①今年度の到達点：早期療育プロセスにおけるUXの定量化

発展的開発を行ったAI-PACを用いて、現場での実証実験をおこなった。コロナの影響により開始が遅れたものの、24名のプロフィールと紐づけた正確なデータを蓄積することができた。遅れが出たデータ解析のプロトタイプにそったリコメンド機能の開発や、リコメンド機能に基づいた支援の妥当性検証については、次年度の実施とする。

1-②今年度の到達点：人材育成プロセスにおけるUXの定量化

身体感覚を含む学習をデザインするため、VR空間と受講生の身体動作とのインタラクションがある形で、個別最適化された人材研修を行うための発展的開発を行った。2名に対し、現場での試験運用を行い、アンケートの回答をもとに、バグの洗い出しを行い、インタラクションモードの開発が完了した。

【実施項目 2】 事例研究を通じた臨床の知の蓄積プラットフォームの構築

事例研究の蓄積アプリケーションを活用した臨床ワークショップを13名に対し開催し、15件の事例研究データを蓄積した。各事例研究の妥当性の検討として、効果量の自動判定と、事例研究実施者の自己評価を行い、評価の妥当性を検討した結果、78%の一致率となった。当事者（保護者）からの評価等の有効性も含め、次年度以降も継続して妥当性の検討を行っていくとともに、事例研究の件数を増加していく。

【実施項目 3】 バーチャル政策委員会（障壁の可視化と対話による政策提言）

継続して、バーチャル政策委員会を3か月に1回程度開催した。また、市民が参加できるシンポジウムの開催を行い、88名が参加した。また、自治体でのICTの活用やデータの利活用に関して、インタビュー結果をもとに自治体ごとに現状や課題が大きく異なる現状をまとめた。デジタル庁や鎌倉市を訪問し、政策担当者との意見交換や、協議を重ねた。

(4) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

・プロジェクトの達成目標に対して：当初の計画についてはおおむね達成が出来ているが、現場と連携をした実証実験については、新型コロナウイルスの影響もあり遅れているため、感染対策等を万全に行い、次年度での実施をめざす。

・各実施項目で得られた結果や成果を俯瞰・統合した結果分かったこと： 本年は、アドバイザーや統括との意見交換を重ね、より実際に取り組んでいる内容に近い「市民科学とパーソナルデータを基盤とした発達障害支援の臨床の知の共財化」というプロジェクト名に変更を行った。本プロジェクトでは、研究を主な生業としない市民（現場の支援者や保護者を含む）が、日常的な対人支援行動の中で、データを蓄積することを重視する。それを解析し、共財として社会に還元していく仕組みの実証実験と、そこからえられた知見とともに科学技術イノベーション政策への提言をまとめる。

特に、科学技術を活用して収集・解析したデータを活用する際には、データとしての定量的妥当性の評価と、個人の体験の評価が一致するか、妥当性を十分に検討することが求められる。

・今年度に発覚した次年度に向けての課題とその解決方法の検討：現場での実証研究を軸

としたプロジェクトであるが、プロジェクトの方向性の変化や、コロナの影響から、少ないデータをいかに科学的に検討し、知見を見出すか、という点が重要であると考えます。対人支援や連携の質的な変化についても、科学的な手法を用いて検討を行うことを目指し、共同研究者や協力者とより緊密な連携を重ねる。また、鎌倉市をはじめとする自治体との連携を重視し、より現実的な政策への提言を取りまとめていく必要がある。

2 - 3. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2021年4月6日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	共同研究者、研究代表者、研究マネージャーで今後の進め方を検討
2021年4月23日	障壁調査・政策提言グループ会議	オンライン	RISTEXメンバー、研究代表者、研究マネージャーで今後の進め方を検討
2021年4月23日	熊PJミーティング	オンライン	プログラムAD、研究推進委員、統括、RISTEX事務局、ADDS熊、ADDS竹内、ADDS小笠原
2021年5月22日	障壁調査・政策提言グループ会議	オンライン	バーチャル政策委員会
2021年5月28日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	東大教授 橋田先生へのPLRヒアリング
2021年6月2日	障壁調査・政策提言グループ会議	オンライン	研究代表者、研究マネージャーで今後の進め方を検討
2021年6月7日	障壁調査・政策提言グループ会議	オンライン	研究代表者、研究マネージャーで今後の進め方を検討
2021年6月10日	障壁調査・政策提言グループ会議	オンライン	研究代表者、研究マネージャーで今後の進め方を検討
2021年6月11日	熊PJミーティング	オンライン	プログラムAD、研究推進委員、統括、RISTEX事務局、ADDS熊、ADDS竹内、ADDS小笠原
2021年6月29日	ビッグデータ分析会議	オンライン	AI-PACアプリケーション開発とビッグデータ分析についての会議
2021年6月29日	障壁調査・政策提言グループ会議	オンライン	研究代表者、研究マネージャーで計画書の修正点を検討
2021年7月6日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	VR開発に関する会議
2021年7月15日	障壁調査・政策提言グループ会議	オンライン	研究代表者、研究マネージャーで計画書の修正点を検討
2021年7月26日	ビッグデータ分析会議	オンライン	AI-PACアプリケーション開発とビッグデータ分析についての会議

2021年8月5日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	VR開発に関する会議
2021年8月5日	障壁調査・政策提言グループ会議	オンライン	研究代表者、研究マネージャーで今後の進め方を検討
2021年8月13日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	研究協力者への開発相談会議
2021年8月18日	ビッグデータ分析会議	オンライン	実証実験に向けたAI-PACアプリケーション説明会
2021年8月18日	ビッグデータ分析会議	オンライン	サービス等利用計画案・障害児支援利用計画案の説明と現場の連携についての相談
2021年8月18日	計画書変更検討会議	オンライン	研究代表者、研究マネージャーで計画書変更点を検討
2021年8月28日	障壁調査・政策提言グループ会議	オンライン	バーチャル政策委員会
2021年8月30日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	研究代表者、研究マネージャーで相談支援アプリ開発項目を検討
2021年9月1日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	VR開発についての会議
2021年9月15日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	研究代表者、研究マネージャーで個人アプリの項目を検討
2021年9月21日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	研究代表者、研究マネージャーで個人アプリの項目を検討
2021年9月27日	ビッグデータ分析会議	オンライン	AI-PACアプリケーション開発とビッグデータ分析についての会議
2021年9月28日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	PLR開発についての会議
2021年10月4日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	PLR開発についての会議
2021年10月8日	計画書変更検討会議	オンライン	研究代表者、研究マネージャーで計画書変更点を検討
2021年10月4日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	PLR開発についての会議
2021年10月8日	計画書変更検討会議	オンライン	研究代表者、研究マネージャーで計画書変更点を検討
2021年10月15日	ビッグデータ分析会議	オンライン	AI-PACアプリケーション開発とビッグデータ分析についての会議
2021年10月18日	障壁調査・政策提言グループ会議	オンライン	RISTEXメンバー、研究代表者、研究マネージャーで進捗報告・今後の進め方を検討

2021年10月26日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	相談支援における調査の今後の進め方の相談・検討
2021年10月29日	ビッグデータ分析会議	オンライン	AI-PACアプリケーション開発とビッグデータ分析についての会議
2021年11月2日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	研究マネージャー・経理担当者で予算についての会議
2021年11月12日	ビッグデータ分析会議	オンライン	AI-PACアプリケーション開発とビッグデータ分析についての会議
2021年11月12日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	研究代表者、研究マネージャーで全体予算を検討
2021年11月13日	障壁調査・政策提言グループ会議	オンライン	バーチャル政策委員会
2021年11月15日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	PLRシュミレーション会議
2021年11月27日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	単一事例研究ワークショップ 1DAY研修
2021年11月30日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	PLR開発についての会議
2021年12月6日	ビッグデータ分析会議	オンライン	AI-PACアプリケーション開発とビッグデータ分析についての会議
2021年12月8日	デジタル庁村上統括官との意見交換	デジタル庁	本プロジェクトの方向性への助言および政策に関する意見交換
2021年12月22日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	単一事例研究ワークショップ 中間研修
2022年1月11日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	単一事例研究ワークショップ 個人面談
2022年1月12日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	研究代表者、研究マネージャーで定例
2022年1月12日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	単一事例研究ワークショップ 個人面談
2022年1月13日	ビッグデータ分析会議	オンライン	AI-PACアプリケーション開発とビッグデータ分析についての会議
2022年1月14日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	単一事例研究ワークショップ 個人面談
2022年1月17日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	単一事例研究ワークショップ 個人面談
2022年1月17日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	単一事例研究ワークショップ 個人面談
2022年1月19日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	単一事例研究ワークショップ 個人面談

2022年1月24日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	単一事例研究ワークショップ 個人面談
2022年1月27日	ビッグデータ分析会議	オンライン	AI-PACアプリケーション開発と ビッグデータ分析についての会議
2022年1月28日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	単一事例研究ワークショップ 個人面談
2022年2月4日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	VR開発についての会議
2022年2月5日	障壁調査・政策提言グループ会議	オンライン	バーチャル政策委員会
2022年2月5日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	シンポジウム開催
2022年2月7日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	単一事例研究ワークショップ 個人面談
2022年2月8日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	PLR開発についての会議
2022年2月9日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	PLR開発についての会議
2022年2月9日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	単一事例研究ワークショップ 個人面談
2022年2月10日	ビッグデータ分析会議	オンライン	AI-PACアプリケーション開発と ビッグデータ分析についての会議
2022年2月22日	イノベーション政策のための科学 研究開発プログラムサロン	オンライン	研究代表者の熊が出席、研究プロジェクトの進め方について様々な事例とディスカッションを通じて学んだ
2022年2月26日	科学技術活用研究グループ会議	オンライン	単一事例研究ワークショップ 最終発表会
2022年3月25日	ビッグデータ分析会議	オンライン	AI-PACアプリケーション開発と ビッグデータ分析についての会議

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

AI-PACを活用した療育データの蓄積については、鎌倉、荻窪にある児童発達支援事業所での実証実験を行った。事例研究アプリは、現場の支援者に対してワークショップを行った。相談支援のPLRアプリについては、鎌倉の事業所にて実証を開始することを目指し、鎌倉市の鎌倉市スマートシティ官民研究会に参加し、意見交換や協議を重ねた。

4. 研究開発実施体制

(1) 障壁調査・政策提言グループ（グループリーダー：熊仁美）

実施者：NPO法人ADDS、慶應義塾大学

協力者：三菱リサーチ&コンサルティング株式会社、株式会社AiCAN、経産省、厚労省

実施項目①：政策化の方略・障壁についてのインタビュー調査

実施項目②：バーチャル政策提言委員会を通じた政策の提言

グループの役割の説明：研究開発成果をもとに、発達障害児への早期支援の現場における科学技術の活用によるアセスメントと支援方略の選定が、政策として均てん化されるための障壁や、科学技術イノベーション政策としての課題、ブレークスルーポイントの特定などを行う。

(2) 科学技術活用研究グループ（竹内弓乃）

NPO法人ADDS、獨協医科大学、三菱リサーチ&コンサルティング株式会社、PEPOS(さくらインターネット株式会社より変更)

実施項目①：AI-PACの機能拡張研究と集積されたデータのAIによる解析

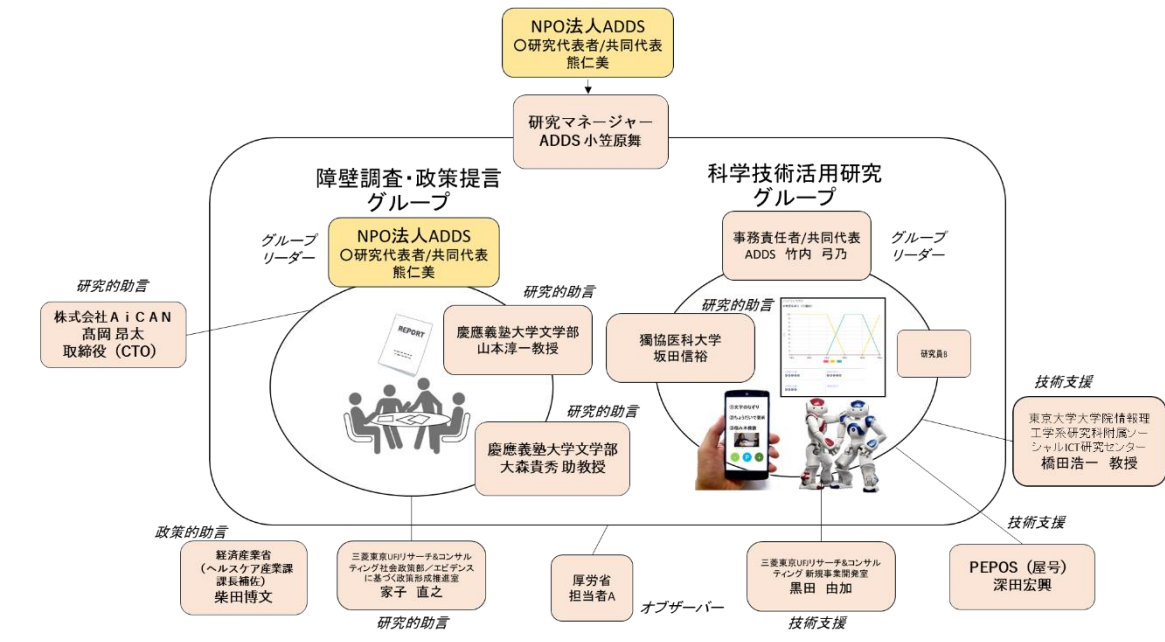
実施項目②：VRを活用した人材育成研修の実装研究

実施項目③：事例研究型の情報集積プラットフォームの構築

実施項目④：PLRの開発と相談支援事業への実装

グループの役割の説明：AI-PACやロボット・VRの人材研修アプリ、PLRを活用した相談支援アプリの開発など、技術の機能拡張や実装研究を行い、UXの定量化や均てん化のための技術活用を加速させる機能の開発を行う。また、オープンサイエンスによる事例研究集積型のエビデンス構築を行う情報プラットフォームの構築を行う。

*全体の変更：研究マネージャーが新たに雇用した小笠原（産休代理）に変更となった。協力者に、東京大学橋田浩一教授が加わった。



5. 研究開発実施者

障壁調査・政策提言グループ（グループリーダー：熊仁美）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
熊 仁美	クマ ヒト ミ	特定非営利活動法 人ADDS	人材育成事業 部	共同代表
加藤愛理	カトウ ア イリ	NPO法人ADDS	情報発信事業 部	理事
小笠原 舞	オガサワラ マイ	NPO法人ADDS	管理部	研究マネージ ャー
加藤孝央	カトウ タ カオ	NPO法人ADDS	情報発信事業 部	研究員
小木曾文香	オギソ ア ヤカ	NPO法人ADDS	人材育成事業 部	研究員

科学技術活用研究グループ（グループリーダー：竹内弓乃）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
竹内 弓乃	タケウチ ユノ	NPO法人ADDS	保護者支援事 業部	共同代表
菊地麻美	イイダ ア サミ	NPO法人ADDS	保護者支援事 業部	支援員
加藤孝史	カトウ タ カシ	NPO法人ADDS	保護者支援事 業部	支援員
金田琢磨	カナダ タ クマ	NPO法人ADDS	保護者支援事 業部	支援員
丸瀬里奈	マルセ リ ナ	NPO法人ADDS	人材育成事業 部	支援員
小木曾文香	オギソ ア ヤカ	NPO法人ADDS	人材育成事業 部	支援員
秋元 修子	アキモト シュウコ	NPO法人ADDS	人材育成事業 部	支援員
日野由紀	ヒノユキ	NPO法人ADDS	人材育成事業 部	非常勤

山本淳一	ヤマモト ジュンイチ	慶應義塾大学心理 学研究室	文学部	教授
坂田信裕	サカタ ノ ブヒロ	獨協医科大学	医学部	教授
大森貴秀	オオモリ タカヒデ	慶應義塾大学心理 学研究室	文学部	助教授
橋田浩一	ハシダ コ ウイチ	大学院情報理工学 系研究科附属ソー シャルICT研究セ ンター.	ソーシャル ICT 研究セン ター.	教授

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2022 年2月5 日	「オープンサイエンスに基づく発達障害支援の臨床の知の体系化を通じた科学技術イノベーション政策のための提言」第三回シンポジウム テクノロジー×福祉が描く未来社会～子どもを中心としたデータ利活用を目指して～ vol.2	ADDS	Zoom配信	88名	<p>プロジェクト概要を、関係者や市民と共有、発信、ディスカッションする目的で実施。</p> <p>14:00- 「市民科学とパーソナルデータを基盤とした発達障害支援の臨床の知の共財化PJが目指す未来」 熊 仁美（特定非営利活動法人 ADDS共同代表）</p> <p>14:30- 「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム：すべての子どもの社会的孤立・孤独・排除を予防する学校を中心としたシステムの開発」 山野 則子氏（大阪府立大学 学長補佐 人間社会システム 科学研究科 教授）</p> <p>15:40- 「パーソナルデータの分散管理に基づく福祉の未来」 橋田 浩一氏（東京大学 大学院 情報理工学系研究科 教授）</p> <p>16:40- 質疑応答</p>

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

- (1) 書籍、フリーペーパー、DVD
なし
- (2) ウェブメディアの開設・運営
なし
- (3) 学会（6-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等
なし

6-3. 論文発表

- (1) 査読付き（ 0 件）
 - 国内誌（ 0 件）
 - 国際誌（ 0 件）
- (2) 査読なし（ 0 件）

6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

- (1) 招待講演（国内会議 0 件、国際会議 0 件）
- (2) 口頭発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）
- (3) ポスター発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等

- (1) 新聞報道・投稿（ 0 件）
- (2) 受賞（ 0 件）
- (3) その他（ 0 件）

6-6. 知財出願

- (1) 国内出願（ 0 件）
- (2) 海外出願（ 0 件）